

2018年1月21日(日)／説教者:神谷武宏

説教:「イエスの怒り」

聖書:マルコによる福音書3:1～9

イエスの怒りはどこにあるのか？イエスは会堂に入られると「そこに手の萎えた人がいた」。イエスはその手の萎えた人にどう向き合うのか、見ている人たちがいた。安息日に治療は違法である。しかしイエスは癒しの業を行う。

そもそも、この手の萎えた人はどうしてこの会堂にいたのか。自らの意思で、イエスの癒しを求めて来たのか。実はそうではなさそうである。誰かに連れて来られた。意図的に。では誰に連れて来られたのか？この箇所本文脈からして2節の「人々はイエスを訴えようと思って、安息日にこの人の病気を癒されるかどうか注目していた」とある。ここでは明らかにイエスを訴える口実を作るための罠であった。その罠のための道具としてこの手の萎えた人が連れて来られたようである。普段は病気で動けない人を会堂に連れてこようなんて微塵も思わない連中。むしろ律法をちゃんと守らないからその罪の証しとして病気になったんだと言い張るそのような学者らが、イエスを訴える口実を作るための道具としてこの病人を利用した。イエスはそのことに怒りを発し、あえて挑戦的に命を張ってでもこの状況と闘おうとされたのではない。

イエスはこの人を会堂の「真ん中に立ちなさい」と言う。何故か？真ん中は、注目が集まるところ。私たちの意識が常に集まるところ。その「真ん中に」イエスは手の萎えた人を立たせた。人間としての尊厳を軽んぜられたその人を「真ん中に」招いたのである。それは、常に私たちが、そのような小さくされた者への思いを忘れず、大切にしなさいというメッセージではないか。

私たちの教会はどうか？そのような方が隅に追いやられてはいないか？私たちの地域社会はどうか？この国はどうか？「イエスの怒り」は、小さくされた者を軽んじる状況に、片隅に追いやる社会に怒りを発していく。私たちは、イエスのそのような怒りの姿勢に勇気を頂く思いにならないだろうか。イエスの怒りに希望を見せられるものではないか。

今、沖縄で起きている米軍のやりたい放題。戦後とは呼べない常に戦争の延長線上に置かれている、ここ沖縄。命の尊厳が脅かされている状況に真摯に向き合わない日本政府。そこに「イエスの怒り」がある。私たちは、この「イエスの怒り」の中に何を見るか？同時に問われている。(神谷)